



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

B年(2021年1月10日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤの預言 55章1-11節

第二朗読：使徒ヨハネの手紙 5章1-9節

福音朗読：マルコによる福音 1章7-11節

今日のテーマ：わたしはあなたを喜ぶ

瀬田教会の説教壇には文字が刻まれています。ラテン語で `Hic est filius dilectus. Audite illum. Appravit Gloria Dei、と記されています。訳すと「これはわたしの愛する子。これに聞け。神の栄光が現れた。」となります。これは、今日の福音の箇所(マコ1章11節)と、イエスさまのご変容の箇所(マコ9章7節)そして、『ペトロの第二の手紙』1章17節の言葉を組み合わせましたものです。どのような経緯で、この言葉が説教壇に刻まれたのかは分かりませんが、わたしは、このことばが好きです。

説教壇から語られる言葉は、神の言葉です。主日であれば、第一朗読では旧約聖書の言葉が、第二朗読では新約聖書の使徒たちの言葉が、そして福音朗読では福音が読まれます。確かに会衆の誰かが、あるいは司祭が言葉を読む、朗読するのですが、その事実の中に大切な真実が隠されています。それは、第一に朗読された言葉は、神の言葉であるということです。第二に朗読したのは確かに人間ですが、神ご自身が語られているのです。正確に言えば、復活した主イエス・キリストご自身が語っておられるのです。

「二人または三人が私の名によって集まる 곳には、私もその中にいるのである」(マタ18章20節 聖書協会共同訳)とイエスさまは仰いましたから、教会が行う典礼、礼拝の場に復活したイエスさまはいてくださいます。そのイエスさまが語りかけるのです。ですから朗読は主が語る言葉です。朗読者の背後に「愛する子」であるイエスさまの姿を認めたいと思います。小さな子どもたちが一生懸命、朗読をする姿をハラハラドキドキで見守りますけど、けっこう上手に朗読が終わると、やっぱりイエスさまが語ってくれたのだなあと思います。目の不自由な方が朗読することがありますけど、ほんとうによく準備してきたのだなあと思います。その方が語っているというより、イエスさまが語らせているという感じですか。

どんな方が朗読しようとも、上手に朗読しようとも、つかえつつかえ朗読しようとも、天の御父は、「この言葉は、私の愛する子の言葉です。耳を傾けてください」と招いておられるのです。それは、この世に対する神の栄光の現れです。そして、朗読された言葉が復活した主イエス・キリストの言葉なのだという真実は、その同じ主が、もっと大切ないのちの言葉をこの御ミサの中で語ってくれることを予感させます。「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ」というご聖体の制定の言葉です。いえ、逆なのかもしれません。ミサの中でホスチアがご聖体になるときの言葉が復活した主イエス・キリストだからこそ、同じミサの中で語られる神の言葉もまた主の言葉であると分かるのかもしれません。

さて、今日の福音の言葉に戻りましょう。ヨルダン川で洗礼を受けられたイエスさまの上に霊が鳩のように降り、言葉を上げます。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マコ1章11節 新共同訳)。「心に適う」は、原文ではエウドケオーと言いますが、共観福音書でこの言葉が使われるときには必ず神が主語となります。本来の意味は「同意する、よいと考える、誰かがある人の心に適う」の意味ですが、同時に「十分に喜び満足している」という意味にもなります。この箇所を「わたしはあなたを喜ぶ」と訳す聖書もあります(新改訳)。

確かに、イエスさまは天の御父にとって喜びでした。それは、天の御父の心がイエスさまの心とピタリと一致していたからです。イエスさまは御父の心に適うものだったからです。それだけではありません。子どもが親にとって大きな喜びであるように、「わたしの愛する子」であるイエスさまは御父にとっての喜びそのものです。「喜び」が御父と御子であるイエスさまとを結び合わせます。

人間は罪深いですから、自分という存在が相手にとって喜びとなるという事実をなかなか理解できないではないでしょうか。実感できないのではないのでしょうか。イエスさまは、自分が天の御父からみて喜びであるという事実をどのように実感していったのでしょうか。喜びの実感というのはお互いの関わり合いの深さとつながると思います。イエスさまは天の御父との結びつきの深さを体験しながら、ご自分が御父にとっての喜びであることに気がついていったのでしょうか。そして、喜びであるからこそ、御父に喜ばれるように生きたいと願ったのでしょうか。

「わたしはあなたを喜ぶ」という御父の言葉は、わたしたち一人ひとりにも響きます。なぜなら、わたしたちは神から見ると喜びなのです。どんなになろうとも喜びなのです。喜びの存在として生きていくのが、わたしたちの生き方なのです。「神さまは喜んでくれる」という実感は、わたしたちに勇気を与えてくれます。力を与えてくれます。

喜びが失われつつある今の世にあって、ほんとうの喜びをなかなか体験できない現代社会にあって、「わたしはあなたを喜ぶ」という御父の言葉に希望を託して生きていきましょう。